

第八回 美しい日本語で詩を読む会

朗読詩集 2020.5.10



霧の中	有馬 敲
インドのジプシー	村田 辰夫
削岩機	武西 良和
音にふれて	井上 良子
音楽	市原 礼子
波は砂の下	加納 由将
速達のひと	北原 千代
風の丘	小湖舎 伸行
言の香	波野 仁
フーガの技法	清水 崇彦
周りの音	長岡 紀子
私は何も云いません	スノードロップ
ドラマーの恋	すみくらまりこ

霧の中

有馬 敲

おれは霧のなかに生まれ、霧のなかに育った そし
ていま おれは霧のなかに住んでいる

四方を山にかこまれた小さな盆地 そこでは深い
霧のなかで いつも壁のようなものが眼の前に立
ちはだかってきた 家とか土塀とか堤防とか

それに耐えられなくなったとき 稲田のまんなか
を半円形に走るローカル線のレールに揺られて
この地方を脱け おれは遠い海へ出かけていった
とつぜん 視界にひろがる海原をみた少年のころ
のときめきが かすかな潮のざわめきとともによ

みがえってくる

しかし 水平線のみえるはずの海にも霧は立ちこ
めていた おれは岩壁のそばの小屋にはいると
日焼けした若い漁夫と肩を合わせて飲んだ 強烈
な匂いのこもる透明な液体を コップになん杯か
あおり そして歌った

夜はまた いちめんに白い闇であつた 煙るよう
なものというものを包んでしまっている 不眠の
おれの耳には こんなとききまつて 山間をぬけ
てきたらしい列車の響きが伝わり 鋭い笛が短く
鳴る

見なれぬここは夢にみた海辺か 捨ててきた盆地
か 岬のような丘陵に立って おれは霧のなかで
灯台のようにまたたいていなければならなかった

インドのジプシー

ジャーメイン・ドルーゲンブロート

音もたてず

彼女の細身のシルエットは

床に触れず

彼女は浮かんでいる

足首の飾りをチャリンと鳴らし

継目のない動きを裏切っている

(私は目を閉じる)

彼女はスペインのジプシー酒場に現れ

激しいソレアーを踊っている

掻き鳴らすギターに煽られ

目も心も眩む

情熱の渦 誘惑と色彩

木の床すら震えている

彼女の情熱的な素足のタップで

タップ、スキップ、跳躍が

深紅のドレスを 手繰り寄せ 引っ張り

ちらちらと一瞥する

もうだめだ

夢のなかでも

ソレアー…アンダルシア地方の踊り

すみくらまりこ訳・村田辰夫 監訳

削岩機

武西 良和

——ガガガガガッ。

機械が岩を見失って叫び声を上げ

古いセメントの塊を砕こうとしている

音は古い家並みにこだまし

ぼくの耳元までやって来た

——ドドドドドドドッ。

ぼくが組み立てている

言葉の塔を崩しにかかる

もう少しでこの建物が完成するはずだったのに

あの音が柱を揺さぶり始める

耳元で出遭った音を

誘い入れたばかりに

自分の建物が揺れている

音そのものはぼくの建物に近寄れないが

耳という通路を通って

建物に近づいたのだ

ああ 耳の自由が奪われることへの憧れ

ぼくは慌てて耳を塞いだ

飛び散った破片で耳に当たった手が傷つき

耳を覆っていた手の力が弱まり

指の隙間から音が侵入し始める

ぼくの建物は基礎が軟弱だ

砂上の楼閣というほどではないにしても

その弱点を衝こうとするのだ

飛び散った破片が柱や壁を傷つけ

崩れ始める

筋交いも役に立っていない

仰向けに寝ていたぼくは

ごろんと寝返りを打つと建物は

あっけなく倒壊していった

部屋の隅に張られていた蜘蛛の巣の

ネットもその崩れる勢いを

防ぐことができなかった

蜘蛛はびっくりしてピョンと跳びはね

わずかに残った一本の糸を伝って

暗闇へ逃げてしまった

削岩機の音も蜘蛛のあとを追って

暗闇の中へ飛び込んだ

光の入れない暗闇は

蜘蛛を守ってやれるか

〈初期形〉二〇一七年11月22日（木・祝）

午

後4時35分

自宅で近くの工事の音を聞いている

音にふれて

井上 良子

家の南側から北側へ

細い用水路が流れてくる

田畑を潤す水が通っていく

天気の良い日に窓を開け放つ

水のあみを編みながら

月の満ち欠けの夜も

新月に星が瞬く夜も

ただ下へ流れることで

水路はせせらぎ歌う

途切れることを知らず

角の和室に人が泊まると

あの音はどこからですか

とたいていの客は聞く

いい音でしょう

長くここにこうして住んでいると

日々淡々と只々わたしの

胎内までを水音が通っていく

み

音楽

市原礼子

朝がきた

小鳥がさえずる

風がわたる

竹林がゆれる

ナンキンハゼの実が転がる

恋心を抱いた人に

好きな人がいることを知った日

あてどなく街を歩いた

大地が揺れていた

迷い込んだ路地の古風な建物

蔦の葉が壁を這っていた

坂の途中の音楽喫茶

ひとり聴いたモーツァルト

大音量の音楽が胸の奥を震わせた

音色に身体をあずけ

長い時間を過ごした

それからは何度もそこへ行つた

いつしか季節が移り

しつかりした足取りで

歩けるようになっていた

子猫を呼んで親猫が喉を鳴らしている

あかんぼが夢を見て笑っている

どのような楽しいことが起きているのでしょうか

世界にはまだ見えない音が溢れている

波は砂の下

加納 由将

樋をつたう水の音

半分溶けた赤い太陽

葉っぱをたたく雨の音

夕闇迫る紫の天

庭を見ると

木の葉に

真珠の水滴がしがみついている

先生の手を離すと

プールの底に吸い込まれる

それは小学生の私

縁側を濡らす雨の音

ゴミを燃やすドラム缶の音

居間では

誰も見ていないテレビから

バラエティー番組の叫び声と笑い声

祖母は開いている窓を

片っ端から閉める

母は葱を刻んでいる

やかんの口からこぼれる

なんとも悲しい吐息

なにもしないなら手伝ってという母の声

手伝うより

雨の中を走るほうが大事

足元にあつた長靴に

足を突っ込み

出ていく

心の中はカラカラ

この雨を

少しでも心の中に染み込ませたい

祖母は

出掛ける私を見て

どこへ行くのと厳しく甲高い声

無視

道は

水しぶきに消え

白く霧がかつた川になり

雨の波紋が流れている

東屋には

昨晚

誰かがやった花火の抜け殻

椅子に座ると

水のそこの静けさ

道には

ときどきなにか大事件

誰かが走っている

学校とバイトの往復で

なんの刺激もない毎日

私の心は火傷

ヒリヒリするのを誰も知らない

この雨で

その痛みを少しでも取りのぞきたい

高台の東屋のグラウンド

錆びついて動かなくなった三輪車

食べかけで捨てられたお菓子

砂場に忘れられたプラスチックのスcoop

水の中にたたずむ私

グラウンドの向こうに光の川

まわりの家からは

脂の焼ける匂い

焼肉

道には歩いている人も

シャワーを浴びる人も通らない

ただ雨の音が聞こえている

道には

人の影一つ

その顔は

遠い日に毎日眺めていた虹色の恋

今 子供の親

心に波が押し寄せ眼からあふれる

いつも彼女の家の側を通るたび

彼と抱き合っている

僕の頭の中で

波はすぐに引き

過渡には硬く黒いなにか

ますます水は届かない

雨の中へ飛び出す

柔らかい雨は

もう心を濡らしはしない

頭を

肩を

腕を濡らしている

白いTシャツには雨の黒い斑点

あの人の影はもう消えている

波はもう砂の下

雨も一瞬湿らすだけ

また痛み出す

心の火傷

あの人との別れから

心には緑がなくなり

とうとう砂漠になった

家の中には

炊きたてのご飯の香り

相変わらずテレビからにぎやかな声

母と祖母の笑い声

私の心の乾き

水が茶わんに碎ける音

餌をせがむ犬の声

空には幾千の星

道を陽気な声で通る恋人たち

ますます心の中に砂地が広がっていく

全てを白く見せる月光

どこかで暴走族のエンジン

誰も私の乾きを知らないまま

日めくりカレンダーが

また一枚 めくれる

速達のひと

北原 千代

わたしの名まえは小鳥に似ていたが

すこしも小鳥らしくなかった

そのひとが呼ぶと小鳥に似ていた

はじまりは絵葉書でそのうち

まいにち届く速達は赤いバイクの配達人が届けて

くれた

運転免許がとれたら貴船へ行きましょう

わたしはコットンの木を植えた

じかんのことは知らなかった

速達のひとはなぜあんなにもいそいで

百日紅は咲きましたか

きようは曇っています

ふつうのことばかりまじめに伝えようとしたのだ

ろう

貴船にドライブするときは浴衣がよいでしょう

わたしはコットンの水やりを欠かさなかった

雑草とおなじ緑いろで雑草よりもゆっくり育った

速達は止んだ

書くこともなくなったのだろう

ようやくコットンの実がはじけた

机のうえにコットンの実を飾り写真つきのメール

を送った

けれど糸巻きの道具がなく針仕事も苦手です

さらに夏を見送った

あいかわらず水やりばかりしていた

じかんのことは知らなかった

ときおりパソコンに音信が運ばれてきた

何十年もおあいしませんね

もう待てないかもしれません

あなたの浴衣のことです

コottonの木が枯れた

雨とわたしが水をやりすぎたからコottonの木が

枯れた

もう一滴の水もうけいれることができない亡骸に

からだのひとりでにかたむくようなこの

じょうろの重みをどうして伝えたらよいのだろう

山鳩が啼いている

をしやぶってから

しろい仔犬を

わたしに抱かせた

わたしが庭の 肉桂の樹だったころ

夏はけだるく

赤い痛みをおび

呼びあう声に

骨がふるえた

風の丘

小湖舎 伸行

静寂な夜空を一羽のカモメが闊歩する

灼熱の大地で白熊があくびをしたまま眠りについた

かつて深緑に囲まれて雨季と乾季を繰り返した国
はもう滅んだ

荒れ果てた王国に旅人が訪れた
バイオリンを携えた吟遊詩人だ

詩人は岩に腰掛けため息をついた

どのくらいの時間が過ぎたのだろう
無音と夕焼けが辺りを支配した

詩人はバイオリンを奏でない

彼は草原に移動して寝転んだ
旅人はここで夜を明かす

雨は一粒も降らず雲ひとつない
ほのかな月の光と星空が辺りをつつんだ

朝焼けの太陽と小鳥のさえずりが

詩人を眠りからさます

詩人は大きなあくびとともに身体を伸ばした

そして一拍息を整えた後に鞆から小さな袋を取り
出した

彼は足下の土を少し掘り返して種を植え

土を被せると水筒の水を掛けた

そして日が高く上るまで、旅人は指を組んで長い祈
りを捧げ続けた

周りに流れる音

長岡 紀子

人はみな前に進みたい

見つめる力が行く道を知らせ進む

その力が失われた時

耳を澄ませて空気の流れの中で変化する

かすかな音をも逃さないで方向を知り進む

ある時は 音はよく調和し

楽しみだったり

喜びだったり

励ましだったり

美しく 穏やかで 優しい

ある時は 不協和音となり

哀しみだったり

驚きだったり

恐れだったり

いらだたせ いきり立たせ それは雑音だ

お互いに声という音を「ことば」で交わり

わかり合ったり

退け合ったり

音は生命（いのち）に添って流れている

生命は音を受け入れている

振り回されることもあるような

私は何も云いません

スノードロップ

風の音がヒューヒューとなる

それは、草のところを通るからです

風の音がゴーゴーとなる

それは、山を通るからです

風の音がボタンボタンとなる

それは、トタン屋根が壊れかけているからです

みんな風の音だということです

でも、

私は、何も云いません

ただ、

あなたをひとめ見たかったです。

ドラマーの恋

すみくらまりこむ

詩は音に乗る

音はビートする

ビートは意思を持つ

始まりを告げ

楽団を抑え

歌い手を煽り

急がせ 弛ませ

歌わせ 遊ばせる

余響が消えるまで

ドラマーは

一徹な恋のごとく

辺りを支配する

非売品

二〇二〇年十一月十日

(C) 日本国際詩人協会